

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 自分にカスタマイズされた世界と「他なるもの」への恐怖心

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金杉, 武司, Kanasugi, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000669

自分にカスタマイズされた世界と 「他なるもの」への恐怖心

金杉武司

学生時代にカントの『純粹理性批判』を読んだ。当時の大学には、哲学を学ぶのならばカントを読んで当然といううな雰囲気があった。最初はそもそも何が書かれているのかもわからず、その後に一応のところ上つ面の部分を理解するくらいにはなってもその重要性はわからないままだった。その後、そのまま英米現代哲学を研究する道に進み、しばらくはカントと無縁な時間を過ごした。自分が取り組んでいる現代哲学とカント哲学との根本的な関係性や、現代哲学にとつてのカント哲学の重要性を（ヒューム哲学のそれらとともに）理解できるようになったのは、研究者の道をしばらく歩んだ後のことだった。カントが重要だとわかったというのは私が哲学を研究しているからだ、そのように最初は何が重要なかがわからないままいわば「学ばされた」ものが、後になって重要な意味を持つようになるということは、誰にでも起こりうることだろう。

しかし、最近の「学び」はそのようなものではなくてきているように思える。学生たちの学びは自分の関心のあるものばかりに向かい、自分の関心のある問題・事柄以外にはあまり目を向けない傾向がある。一つには教養軽視・専門重視・実利重視という日本の大学行政のあり方が背景にあるのだろう。また、好きでないものや得意でないものには関わりなくて良いというような世間一般の風潮もあるのかもしれない。

同じようなことが、学びという脈絡だけでなく他の脈絡でも生じている。たとえば、世の中の情報の獲得の仕方である。私が子どもだった頃は、人々の情報獲得の手段は、テレビ・新聞などのマスメディアしかなかった。そのため、関

心はなくとも親と一緒にテレビのニュースを見たり新聞記事の話をしたりすることになり、自ずと自分の関心外の情報が、自分の生活の中に入り込んできた。しかし、核家族化・少子化・メディアの多様化などによって、今では、情報は個人に「カスタマイズ」されるようになった。つまり、人々は自分の関心のある、自分の好きな情報だけに目を向けて生活できるようになってきたのである。またインターネットなどの最近のメディアは、利用者の関心に合わせてさまざまな「おすすり」をしてきたり、あるいは知らぬうちに自分の関心に一致する広告ばかりを見せてきたりして、まさにその傾向に拍車をかける仕組みになっている。最近で言うと、東京で緊急事態宣言が発令されていることを知らずに日々を過ごしていた都民までいるという話もある。

いわば「自分にカスタマイズされた世界」に生きることが可能な時代になってきたということである（もちろん程度の問題であり、完全に「自分の世界」で閉じることができないわけではないし、またそれが何者かによって仕組まれたものである可能性もある）。実に効率的で楽な世の中だと言えるかもしれない。しかし、世界中で生じているさまざまな分断や反知性主義、デマや陰謀論に飛びついてしまう人々の傾向、直接的なコミュニケーションを避けようとする人々の（コロナ禍以前からの）傾向などの一因は、以上のような「世界のカスタマイズ」にあるようにも思える（もちろん、それらには複数の要因があるだろうが）。世界は多様化したとも言われる。しかし、その世界は、「多様？」な個人がそれぞれの「カスタマイズされた世界」に閉じこもる自閉的な世界の集まりであるようにも思われる。

本来の意味での「多様性」とは、世界に対するさまざまな視点を皆が認め、そのさまざまな視点に自ら立ち上るといふことだろう。しかし、自閉的な世界に生きるわれわれは、他の視点の存在にどんな鈍感になってきているように思われる。いやそれは、「他なるもの」、すなわち自分の制御外にある偶然性に対する無意識の恐怖心だと言っても良いかもしれない。他の視点を持つ「他者」や、私たちを取り囲むこの広大な「世界」には、そのような偶然性が満ち溢れている（もちろん、そこには他者に仕組まれているという意味では「偶然でない」ものもありうるが）。真の意味で人生を豊にしてくれるのは、そのような偶然性なのではないだろうか。